

4.28 [土]	第207回 土曜マチネーシリーズ 東京芸術劇場コンサートホール／14時開演 Saturday Matinée Series, No. 207 Saturday, 28th April, 14:00 / Tokyo Metropolitan Theatre
4.29 [日・祝]	第207回 日曜マチネーシリーズ 東京芸術劇場コンサートホール／14時開演 Sunday Matinée Series, No. 207 Sunday, 29th April, 14:00 / Tokyo Metropolitan Theatre

指揮／アジス・ショハキモフ Conductor AZIZ SHOKHAKIMOV P.6

ピアノ／ガブリエラ・モンテロ Piano GABRIELA MONTERO P.9

コンサートマスター／林 悠介 (ゲスト) Guest Concertmaster YUSUKE HAYASHI

ムソルグスキー (リムスキー＝コルサコフ編)

交響詩〈はげ山の一夜〉 [約12分] P.11

MUSSORGSKY (arr. RIMSKY-KORSAKOV) / Night on Bald Mountain

ラフマニノフ ピアノ協奏曲 第2番 ハ短調 作品18 [約33分] P.12

RACHMANINOFF / Piano Concerto No. 2 in C minor, op. 18

- I. Moderato
- II. Adagio sostenuto
- III. Allegro scherzando

[休憩 Intermission]

チャイコフスキー 交響曲 第5番 ホ短調 作品64 [約50分] P.13

TCHAIKOVSKY / Symphony No. 5 in E minor, op. 64

- I. Andante – Allegro con anima
- II. Andante cantabile, con alcuna licenza
- III. Valse : Allegro moderato
- IV. Finale : Andante maestoso – Allegro vivace

[主催] 読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団

[共催] 東京芸術劇場 (公益財団法人東京都歴史文化財団)

[助成] 文化庁文化芸術振興費補助金 (舞台芸術創造活動活性化事業)
独立行政法人日本芸術文化振興会

[協力] 寺田倉庫



5.15 [火]	第612回 名曲シリーズ サントリーホール／19時開演 Popular Series, No. 612 Tuesday, 15th May, 19:00 / Suntory Hall
----------	--

指揮／ヤデル・ビニャミーニ Conductor JADER BIGNAMINI P.7

ヴァイオリン／アルベナ・ダナイローヴァ Violin ALBENA DANAILOVA P.9

特別客演コンサートマスター／日下紗矢子
Special Guest Concertmaster SAYAKO KUSAKA

ロッシーニ 歌劇〈ウィリアム・テル〉序曲 [約12分] P.14
ROSSINI / “Guillaume Tell” Overture

グラズノフ ヴァイオリン協奏曲 イ短調 作品82 [約21分] P.15

GLAZUNOV / Violin Concerto in A minor, op. 82

I. Moderato – II. Cadenza : Andante sostenuto – III. Allegro

[休憩 Intermission]

チャイコフスキー 交響曲第6番 ロ短調 作品74 〈悲愴〉 [約46分] P.16

TCHAIKOVSKY / Symphony No. 6 in B minor, op. 74 “Pathétique”

- I. Adagio – Allegro non troppo
- II. Allegro con grazia
- III. Allegro molto vivace
- IV. Finale : Adagio lamentoso

[主催] 読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団

[助成] 文化庁文化芸術振興費補助金 (舞台芸術創造活動活性化事業)

独立行政法人日本芸術文化振興会



5.20 [日]

第104回 みなとみらいホリデー名曲シリーズ
横浜みなとみらいホール／14時開演
Yokohama Minato Mirai Holiday Popular Series, No. 104
Sunday, 20th May, 14:00 / Yokohama Minato Mirai Hall

指揮／イラン・ヴォルコフ Conductor ILAN VOLKOV P.8

ヴァイオリン／クロエ・ハンスリップ Violin CHLOË HANSLIP P.10

特別客演コンサートマスター／日下紗矢子
Special Guest Concertmaster SAYAKO KUSAKA

ブラームス 大学祝典序曲 作品80 [約10分] P.17
BRAHMS / Academic Festival Overture, op. 80

メンデルスゾーン ヴァイオリン協奏曲 ホ短調 作品64 [約26分] P.18
MENDELSSOHN / Violin Concerto in E minor, op. 64
I. Allegro molto appassionato – II. Andante –
III. Allegretto non troppo – Allegro molto vivace

[休憩 Intermission]

ムソルグスキー (ラヴェル編) 組曲〈展覧会の絵〉 [約35分] P.19
MUSSORGSKY (arr. RAVEL) / Pictures at an Exhibition
プロムナード – I. グノームス (こびと) – プロムナード
II. 古城 – プロムナード
III. テュイルリー (遊びの後の子供たちの喧嘩)
IV. ビドロ (牛車) – プロムナード
V. 殻をつけた雛鳥のバレエ
VI. サムエル・ゴールデンベルクとシュムイレ (金持ちのユダヤ人と貧しいユダヤ人)
VII. リモージュ (市場)
VIII. カタコンブ (古代ローマの地下墓地) – 死せる言葉による死者への呼びかけ
IX. 鶏の足の上の小屋 (バーバ・ヤガー=民話上の妖婆)
X. キエフの大門

[主催] 読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
[助成] 文化庁文化芸術振興費補助金 (舞台芸術創造活動活性化事業)
独立行政法人日本芸術文化振興会
[協力] 横浜みなとみらいホール
[後援] イスラエル大使館



5.30 [水]

第578回 定期演奏会
サントリーホール／19時開演
Subscription Concert, No. 578
Wednesday, 30th May, 19:00 / Suntory Hall

指揮／イラン・ヴォルコフ Conductor ILAN VOLKOV P.8

ピアノ／河村尚子 Piano HISAKO KAWAMURA P.10

コンサートマスター／長原幸太 Concertmaster KOTA NAGAHARA

プロコフィエフ アメリカ序曲 変ロ長調 作品42a [約10分] P.20
PROKOFIEV / American Overture, in B flat major, op. 42a

バーンスタイン 交響曲 第2番〈不安の時代〉 [約35分] P.21
BERNSTEIN / Symphony No. 2 “Age of Anxiety”
I. プロローグ – II. 七つの時代 – III. 七つの段階
IV. 挽歌 – V. 仮面劇 – VI. エピローグ

[休憩 Intermission]

ショスタコーヴィチ 交響曲 第5番 ニ短調 作品47 [約44分] P.22
SHOSTAKOVICH / Symphony No. 5 in D minor, op. 47
I. Moderato – Allegro non troppo
II. Allegretto
III. Largo
IV. Allegro non troppo

[主催] 読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
[助成] 文化庁文化芸術振興費補助金 (舞台芸術創造活動活性化事業)
独立行政法人日本芸術文化振興会

[協力] アフラック
[楽器協力] (株)ヤマハミュージックジャパン、(株)ヤマハミュージックリテイリング銀座店
[後援] イスラエル大使館



アジス・ ショハキモフ

Aziz Shokhakimov

ドイツで頭角を現す新星
人気のロシア音楽で
エネルギーを爆発させる

29歳の若さで世界の一流オーケストラやオペラを指揮する天才。現在、ウズベキスタン国立響の首席指揮者、ミラノ・ヴェルディ響の首席客演指揮者、ライン・ドイツ・オペラの第1指揮者などを務め、世界中から熱い視線を送られている。

読響初登場の今回は、三つのロシア音楽でその才気^{かんぱつ}煥発ぶりを発揮する。若さが^{ほとばし}るエネルギーな演奏に注目だ。

1988年ウズベキスタン生まれ。才能ある子供のためのウスペンスキー音楽院で、6歳から指揮を学ぶ。13歳にしてウズベキスタン国立響で〈運命〉とリストのピアノ協奏曲を指揮してデビュー。翌年にはウズベキスタン国立歌劇場で〈カルメン〉を指揮するなど、非凡な才能を示した。2001年にウズベキスタン国立響のアシスタント指揮者となり、06年から同楽団の首席指揮者の任にある。10年、弱冠21歳でマラー国際指揮コンクールに第2



©Mischa Blank

位入賞を果たす。これまでに、ドレスデン国立歌劇場管、南西ドイツ放送響、ベルリン・ドイツ響、フランクフルト放送響、ロンドン・フィル、ウィーン放送響、ヒューストン響など世界の著名なオーケストラを指揮し、各地で成功を収めている。オペラでは、ベルリン・コーミッシェ・オーパー、ライン・ドイツ・オペラ、ボローニャ歌劇場で〈エフゲニー・オネーギン〉〈アイダ〉〈ホフマン物語〉などを振り、好評を博した。18年6月にはライン・ドイツ・オペラで〈さまよえるオランダ人〉を指揮する。

◇ 4月28日 土曜マチネシリーズ

◇ 4月29日 日曜マチネシリーズ

ヤデル・ ビニャミーニ

Jader Bignamini

イタリア・オペラ界、期待の星
情緒豊かな〈悲愴〉を披露

カリスマ性と洗練された音楽性を兼ね備えたイタリアの俊英。息の長いカンタービレと熱いパッションで世界中の聴衆を魅了している。数々のオペラ経験^{つちか}で培われた多彩な表現力を発揮し、〈悲愴〉をメインに名曲をドラマチックに描きあげる。

1976年北イタリアのクレマ生まれ。98年に巨匠シャイーに見出されてミラノ・ヴェルディ響のクラリネット奏者となり、2012年から副指揮者を、16年から常任指揮者を務めている。また、同響にはシーズン開幕のコンサートに登場するほか、オペラとオーケストラ双方のプログラムでロシア・ツアーを実施して好評を博した。ボローニャ歌劇場、ローマ歌劇場、パレルモ・マッシーモ劇場、ヴェネツィア・フェニーチェ劇場などイタリアの主要な歌劇場で活躍し、パルマのヴェルディ音楽祭、ペーザロのロッシー



©noraitberg

ニ音楽祭にも出演している。また、メトロポリタン・オペラ、フランクフルト歌劇場、ボリショイ劇場、サンタフェ・オペラなど、イタリア国外の一流の歌劇場でも成功を収め、19年にはアムステルダム歌劇場にデビューが予定されるなど、活躍の場を世界に広げている。オペラ以外ではフィレンツェ五月祭管、シチリア響、スロヴァキア・フィルなどへも客演した。〈仮面舞踏会〉〈アイダ〉〈トスカ〉〈カルメン〉等、豊富なオペラのレパートリーを有する。読響には初登場。

◇ 5月15日 名曲シリーズ

イラン・ヴォルコフ

Ilan Volkov

イスラエルの鬼才が初登場
名曲に新たな光を当てる

古典から現代まで幅広いレパートリーを誇り、欧州で注目を浴びる鬼才が読響初登場。鮮烈なタクトで名曲〈展覧会の絵〉を輝かしく響かせ、バーンスタインとショスタコーヴィチという激動の時代を生き抜いた二人の傑作交響曲で鋭い読みを見せる。

1976年イスラエル生まれ。19歳のとき指揮者としてのキャリアをスタートさせた。97年にロンドン・フィルのユース・オーケストラの首席指揮者に就任し、99年には小澤征爾からボストン響にアシスタント・コンダクターとして招かれた。2003年からBBCスコティッシュ響首席指揮者を務め、09年に史上最年少で同響の首席客演指揮者に就任した。11年から14年まではアイスランド響音楽監督・首席指揮者を務めた。これまでにバイエルン放送響、ケルン放送響、シュトゥットガルト放送響、BBC響、バーミンガム市響、アンサンブル・ア



©James Mollison

ンテルコンタンボランなどを指揮。オペラでは、サンフランシスコ・オペラ、グラインドボーン音楽祭などで活躍。オーケストラをより現代的、実験的にしようという試みから自身が創設した「テクニクス・フェスティヴァル」のキュレーターを務め、現代音楽をエレクトロニクスやロックなどと組み合わせ、ジャンルを超えた新しいプログラムを各地で企画している。録音は、BBCスコティッシュ響とストラヴィンスキー「妖精の口づけ／バレエの情景」、リスト「3つの葬送的頌歌」などをリリースしている。

◇ 5月20日 みなとみらいホリデー名曲シリーズ
◇ 5月30日 定期演奏会

A rtist of the month

今月のアーティスト



©Shelly Mosman

ピアノ ガブリエラ・モンテロ

Piano Gabriela Montero

アルゲリッチも絶賛する“ピアノの女神”。ベネズエラ出身。ショパン国際コンクール第3位入賞で注目を浴びた。これまで、ウィーン響、ハンブルク北ドイツ放送響、クリーヴランド管などと共演し、ザルツブルク音楽祭、ルツェルン音楽祭などでも活躍。2009年のオバマ大統領の就任式では、ヨーヨー・マ、パールマンらと室内楽で共演し、全世界にその模様が放映された。作曲や即興演奏も得意とし、幅広いレパートリーを手がけている。CDも多数リリースし、数々の賞を受賞。今回は20年ぶりの来日、読響には初登場。

◇ 4月28日 土曜マチネシリーズ
◇ 4月29日 日曜マチネシリーズ



©Julia Wesely

ヴァイオリン アルベナ・ダナイロヴァ

Violin Albena Danailova

ウィーン・フィル史上初の女性コンサートマスターとして活躍する名手。ブルガリアのソフィア生まれ。ティボール・ヴァルガ国際コンクールなどに入賞。バイエルン国立歌劇場管、ロンドン・フィルのコンサートマスターを経て、2008年にウィーン国立歌劇場管のコンサートマスターに就任。ソリストとしてはハンブルク北ドイツ放送響などと共演しており、17年4月にはソフィア・フィルとのベルクのヴァイオリン協奏曲で絶賛された。使用楽器はオーストリア国立銀行から貸与されている1709年製ストラディヴァリウス“ex-Hämmerle”。読響には初登場。

◇ 5月15日 名曲シリーズ



©Benjamin Ealovega

ヴァイオリン クロエ・ハンスリップ

Violin Chloë Hanslip

世界中に活躍の場を広げるイギリスの実力派。ブロン、テツラフ、R.マスターズらに師事。2002年BBCプロムスにデビュー、翌年協奏曲で米国デビューを果たす。以後、ウィーン・ムジークフェライン、NYカーネギーホールなど世界各地で演奏。これまでにヤンソンズ、マリナー、A.デイヴィスらの指揮で、バイエルン放送響、ロンドン響、フィルハーモニア管などと共演している。ルビコン・クラシックスなどから数多くのCDをリリースしており、受賞多数。使用楽器は1737年製ゲルネリ・デル・ジェズ。読響には初登場。

◇ 5月20日 みなとみらいホリデー名曲シリーズ



©Marco Borggreve

ピアノ 河村尚子

Piano Hisako Kawamura

ドイツを拠点に国際的に活躍する若き本格派。兵庫県生まれ。ハノーファー国立音楽芸術大学在学中、ミュンヘン国際コンクール第2位入賞、クララ・ハスキル国際コンクール優勝で一躍世界の注目を浴びた。これまでに、ティルカーノフ、ルイーダ、ヤノフスキ、ピエロフラヴェックらの指揮で、ウィーン響、バイエルン放送響、ベルリン放送響、チェコ・フィルなど一流楽団と共演している。今年5月から「ベートーヴェン・ピアノ・ソナタ・シリーズ」を開始。読響には2009年に初登場以来、数多く共演している。

◇ 5月30日 定期演奏会

4.28 [土]

4.29 [日・祝]

林 昌英 (はやし まさひで)・音楽ライター

ムソルグスキー (リムスキー=コルサコフ編)

交響詩〈はげ山の一夜〉

作曲：1867年(原典版)、1881～83年(編曲版)／初演：1886年10月27日、ベテルブルク／演奏時間：約12分

〈はげ山の一夜〉は、〈展覧会の絵〉に次いでよく知られているモデスト・ムソルグスキー(1839～81)の作品である。ロシア民話として伝承されている「聖ヨハネ祭(夏至の日)の前の晩、はげ山(樹木のない山)に死神や魔女、幽霊、精霊が現れて大騒ぎして、夜明けと共に消えていく」という話が元になっている。

ムソルグスキーはこの題材に複数回にわたり取り組んでいる。現在「原典版」とされる、彼自身による管弦楽作品は、当時はあまりにも型破りな構成と粗野なオーケストレーションにより周囲の理解が得られなかった(完成後100年近く忘れられていたが、粗削りな音楽も魅力的で、近年は演奏機会が多い)。その音楽の素材を使って再構

築されたのが、未完のオペラ〈ソローチンツィの定期市〉の一場面として作られた版で、独唱と合唱が加わり、「原典版」より展開が整理されながら荒々しい力強さも残る音楽となっている。

そして、ムソルグスキーの死後、このオペラ版を中心にして管弦楽曲に編曲し直したのが、盟友ニコライ・リムスキー=コルサコフ(1844～1908)。彼一流の洗練されたオーケストレーションが施されたことで人気作となり、以来〈はげ山の一夜〉といえば通常は彼の編曲版のことを指す。落ち着かず動き続ける弦、奇声をあげる木管、威圧的な金管が、頻繁な転調を伴って魔物たちの騒ぎを鮮烈に描写。鐘の音を境に澄んだ朝の情景が広がり、木管の清冽なソロを経て、穏やかなニ長調の響きに消えていく。

楽器編成／フルート2、ピッコロ、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器(シンバル、大太鼓、銅鑼、鐘)、ハーブ、弦五部

ラフマニノフ ピアノ協奏曲 第2番 ハ短調 作品18

作曲：1900～01年／初演：1901年11月9日、モスクワ／演奏時間：約33分

12歳でモスクワ音楽院に入学したセルゲイ・ラフマニノフ（1873～1943）は、ピアニストとして優秀だったばかりか、音楽院作曲科の卒業作品として19歳で完成したオペラ〈アレコ〉が成功を収めるなど、作曲家としても順調に歩み始めた。しかし、1897年に行われた交響曲第1番の初演が無残な失敗に終わってしまい、大きな挫折を味わった彼は落ち込み、作曲のスランプに陥ったのである。

ラフマニノフが本格的な創作活動に戻るのは、その3年後。精神科医のニコライ・ダーリと出会い、催眠療法を施されたことがきっかけだったと伝えられる。そこで取り組んだ作品がピアノ協奏曲第2番で、1900年にまず第2、第3楽章が作られ、翌年には第1楽章も完成し、本作はダーリに捧げられた。初演は1901年にラフマニノフ自身のピアノ独奏で行われ、今度は大成功を収めた。創作者として辛い時期に生み出した作品が、万人に愛される名作となったのである。

ところで、ラフマニノフはその3年の間にオペラ指揮者として経験を積み重ね、のちに伝説的バス歌手となるフ

ョードル・シャリアピンと出会って親友になり、大作家アントン・チェーホフと親交を結ぶなど、有意義な時間を過ごしている。ダーリの療法のほかにも、そういった体験の全てがこの名作の魅力につながっているのだろう。

第1楽章 ロシアの教会の鐘を模したとされる、ピアノの深い響きの和音のクレッシェンドによる序奏から、哀愁に満ちた第1主題が重厚なユニゾンで登場する。ピアノによる美しい第2主題も印象的なもの。濃密な歌と情熱を満喫できる、ソナタ形式の楽章。

第2楽章 甘美な情感に満ちた緩徐楽章。弱音器を付けた弦楽器による序奏の後、ピアノの動きに乗ってフルート、クラリネットがロマンティックな旋律を歌い継ぐ。頂点を作る中間部の後、さらに感動を込めて主部の旋律がヴァイオリンで奏でられる。

第3楽章 行進のような序奏とピアノの走句で開始され、前向きな第1主題と、ヴァイオラとオーボエで歌われる第2主題で展開していく。終盤にはピアノの技巧的パッセージが現れ、続いて第2主題による雄大なクライマックスが形成される。

楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（太鼓、シンバル）、弦五部、独奏ピアノ

チャイコフスキー 交響曲 第5番 ホ短調 作品64

作曲：1888年／初演：1888年11月17日、ペテルブルク／演奏時間：約50分

ピョートル・チャイコフスキー（1840～93）は、1878年にモスクワ音楽院の教職の地位を離れてからは、ヨーロッパ各地に滞在する生活が続き、大作の作曲は少なくなっていた。そんな彼が1888年に取り組んだ大作が、交響曲第5番である。第4番から約10年を経ての交響曲に意欲が湧き出たのか、5月から8月という短期間で完成、11月には作曲者自身の指揮で初演された。

本作の特徴のひとつは、冒頭の主題が各楽章に登場すること。チャイコフスキー自身が「運命、もしくは神の摂理に対する完全な服従」と述べたことから、この主題は「運命の動機」と呼ばれることが多く、全曲に統一感を与えるモットー主題となっている。しかも、冒頭では苦悩や抑圧の象徴だった主題が、終結では勝利の凱歌に変貌するというドラマチックな展開を見せることで、聴く人にカタルシスを感じさせる、屈指の人気交響曲となった。

なお、本作の「運命（もしくは服従）」とは実は何なのか、といった作品のメッセージについての様々な観点からの研究や解釈は現在も進行中。聴きやす

楽器編成／フルート3（ピッコロ持替）、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、弦五部

さの裏に謎めいた一面もあることが、この傑作により深い陰影を与えている。

第1楽章 序奏付きのソナタ形式。冒頭2本のクラリネットが提示する、何度も下降していくホ短調の旋律がモットー主題（運命動機）である。主部は付点のリズムを含む第1主題、息の長い第2主題などの要素で、劇的に進行していく。

第2楽章 「アンダンテ・カンタービレ」の美しい緩徐楽章。弦楽器の導入の後、ホルン・ソロの甘美な第1主題、オーボエの憧憬に満ちた第2主題が歌われる。中間部は音楽が切迫し、運命動機が出現する。**第3楽章** ワルツ スケルツォの代わりにワルツが入るのも本作の特徴。優美なメロディーの主部に、細かい動きの中間部が挟まれ、終結直前に運命動機が静かに現れる。

第4楽章 フィナーレ 運命動機がホ長調で現れる序奏に続き、ホ短調の主部は鋭い第1主題、付点リズムの経過句、歌謡的な第2主題、運命動機のファンファーレが次々に出現する。最後は一瞬の全休止の後、ホ長調の堂々たるコーダに入り、運命動機が圧倒的な高揚感をもって歌い上げられる。

道下京子 (みちした きょうこ)・音楽評論家

ロッシーニ

歌劇〈ウィリアム・テル〉序曲

作曲：1828～29年／初演：1829年8月3日、パリ／演奏時間：約12分

ジョアッキーノ・ロッシーニ (1792～1868) は、19世紀前半のイタリア・オペラの最も代表的な作曲家。10代から30代までの間に数多くのオペラを生み出した。その後、音楽活動から引退し、悠々自適の生活を送り、とりわけ美食家として知られた。

〈ウィリアム・テル (ギヨーム・テル)〉は、シラーが1804年に書いた戯曲『ヴィルヘルム・テル』をもとにロッシーニが作曲した最後のオペラ作品。1829年にパリ・オペラ座で初演され、4幕からなる。

物語の舞台は、スイス。総督ジェスレルの圧政に人々は苦しんでいた。スイス独立の指導者の息子アルノールとハプスブルク家の王女マチルドは愛し合っていたが、アルノールの父はジェスレルの部下に殺される。ギヨーム・テルらはスイスの解放を誓った。オーストリアのスイス統治100周年の記念祝典で、ジェスレルはスイス人に対し

自分の帽子に向けて敬礼するよう命ずるも、テルはそれを拒否。ジェスレルは、テルの息子の頭上のリングを矢で射抜くよう命じ、彼は見事にリングを射抜いた。やがてスイスの独立軍との戦いが始まり、テルはジェスレルの心臓を射抜き、スイスが勝利する。そして、アルノールとマチルドは結ばれる。

幕開き前に演奏される序曲は、オペラの内容にしたがい、以下の四つの部分からなる。

第1部 アンダンテ・モデラート。スイスの夜明けの場面。

第2部 アレグロ。嵐の襲来の場面。嵐が過ぎ去ったのちの、フルートによる牧歌的な調べが印象的。

第3部 アンダンテ。穏やかな情景が描かれており、イングリッシュ・ホルンの響きは牧童の笛を思わせる。

第4部 アレグロ・ヴィヴァーチェ。スイス軍の行進を表している。

楽器編成／フルート、ピッコロ、オーボエ2 (イングリッシュ・ホルン持替)、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、打楽器 (トライアングル、シンバル、大太鼓)、弦五部

グラズノフ
ヴァイオリン協奏曲 イ短調 作品82

作曲：1904年／初演：1905年、パテルブルク／演奏時間：約21分

近代ロシアの作曲家、アレクサンドル・グラズノフ (1865～1936) は幼少の頃からたぐいまれな才能を発揮し、「ロシア5人組」のバラキレフから絶賛されるほどであった。同じく「5人組」のリムスキー＝コルサコフに師事し、様々なジャンルの創作を手掛けた。1906年にはパテルブルク音楽院の院長に就任するも、1928年には祖国を去り、パリで帰らぬ人となる。

1890年代、つまり30代にして高い名声を得ていたグラズノフであるが、20世紀に入るとその作風は古めかしく受け取られるようになる。1904年に書き上げられたヴァイオリン協奏曲は、彼特有のロシアの濃厚なリリシズムに満ちており、響きの豊かなテクスチュアや独奏ヴァイオリンの技巧性も特徴である。豊かなメロディラインには、ノスタルジックな情趣が漂う。また、遠くから聞こえてくるような民謡風の調べも魅力。この協奏曲は楽章の明確な区分は示されておらず、続けて演奏される。大きくみて、以下のような三つの楽章と捉えることができよう。

グラズノフは作曲にあたって名ヴァ

イオリニスト、レオポルト・アウアーに助言を求めた。初演ではアウアーが独奏ヴァイオリンを務め、作品も彼に捧げられた。

第1楽章 モデラート イ短調。クラリネットとファゴットの連打に導かれ、独奏ヴァイオリンは憂いに満ちた主題を綿々と歌い上げてゆく。第2主題はへ長調で、穏やかで柔和な響きに包まれている。ソナタ形式に基づいており、音楽は途切れることなく、第2楽章へ入る。

第2楽章 アンダンテ・ソステヌート 変ニ長調。息の長い優美なメロディを、独奏ヴァイオリンが紡ぎ上げる。転調が多いのも特徴で、音の色彩は変化に富んでいる。この楽章では、第1楽章で用いられた二つの主題も登場する。独奏ヴァイオリンの長いカデンツァののち、第3楽章へ続く。

第3楽章 アレグロ イ長調。トランペットのファンファーレに始まり、それをヴァイオリンが受け継ぐ。この部分はフィナーレの主題である。8分の6拍子の付点リズムを伴う動機は、狩りの音楽をイメージさせ、曲中にはバラライカなどの楽器を模した響きも聞こえる。活気あふれる自由なロンド。

楽器編成／フルート2、ピッコロ、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、打楽器 (グロッケンシュピール、トライアングル、シンバル)、ハーブ、弦五部、独奏ヴァイオリン

チャイコフスキー 交響曲 第6番 短調 作品74 〈悲愴〉

作曲：1893年2～8月／初演：1893年10月16日、ベテルブルク／演奏時間：約46分

ピョートル・チャイコフスキー（1840～93）は、1876年から鉄道王メックの未亡人に経済的な支援を受け、その支援をもとに長期間ヨーロッパを旅行することもあった。1890年、14年にもおよぶ彼女からの支援は打ち切られるが、1892～93年にはパリを含むヨーロッパ各地を旅行した。その間に、交響曲第6番〈悲愴〉のいくつかの部分の着想を得たとされる。彼は、1893年2月からスケッチを始め、1か月ほどで大部分を書き上げた。夏に再び創作に着手し、8月に完成させる。その後も、ピアノ協奏曲第3番を完成させるべく編み直す作業を行うなど、彼の創作意欲が衰えた様子はない。10月16日（ロシアの旧暦）にベテルブルクで行われた交響曲第6番〈悲愴〉の初演では、チャイコフスキーが自ら指揮棒を振った。

この初演から9日後、チャイコフスキーは53歳の若さでこの世を去る。彼は、致命的な持病があったわけではなく、死因はコレラなど諸説あり、はっきりしたことは分かっておらず、真相は謎に包まれたままである。

第1楽章 アダージョ～アレグロ・ノ

ン・トロポ ロ短調。重くメランコリックな序奏ののち、音楽は主部に入る。ヴィオラは悲痛な表情を浮かべる第1主題を表す。第2主題はニ長調で、ヴァイオリンとチェロがゆったりと叙情的に歌い上げる。

第2楽章 アレグロ・コン・グラツィア ニ長調。〈白鳥の湖〉をはじめとしたバレエ音楽を書き上げていたチャイコフスキーは、ワルツの作曲を得意としていた。この楽章で披露されるワルツは、ロシアの民俗色を感じさせる5拍子のリズムを用いている。

第3楽章 アレグロ・モルト・ヴィヴァーチェ ト長調。スケルツォ楽章に相当し、スタッカートによる生き生きとした主題をもつ。曲中には、マーチ風の楽想も現れる。

第4楽章 フィナーレ：アダージョ・ラメントーソ ロ短調。それまでの交響曲の伝統にとらわれず、チャイコフスキーはフィナーレに緩徐楽章を置いた。この手法はマーラーも用いている。この楽章は、静寂のなかにもあたかも人生の諦観が^{にじ}み出ているような楽想に支配されている。

楽器編成／フルート3（ピッコロ持替）、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（大太鼓、シンバル、銅鑼）、弦五部

5.20 [日]

飯尾洋一（いいお よういち）・音楽ライター

ブラームス 大学祝典序曲 作品80

作曲：1880年／初演：1881年1月4日、プレスラウ、コンツェルトハウス／演奏時間：約10分

その作風から生まじめな印象を受け、ヨハネス・ブラームス（1833～97）であるが、彼がしばしば独自のユーモアのセンスを発揮したことは見逃せない。この〈大学祝典序曲〉からもブラームス一流の茶目^{ちめ}気が伝わってくる。

1879年、すでに交響曲第1番や第2番、ヴァイオリン協奏曲といった傑作群を世に送り出していたブラームスのもとに、ドイツ（現ポーランド）のプレスラウ大学から名誉博士号授与の申し出が届く。かつてイギリスのケンブリッジ大学から名誉音楽博士号の授与を打診された際には、船旅や儀礼的な諸事を嫌って辞退したブラームスだが、今回は面倒な義務を伴わないとあって、これを受諾した。

翌年の夏、ブラームスはオーストリアの避暑地バート・イシュルに初めて滞在する。この地で、ブラームスはプレスラウ大学への返礼として〈大学祝典序

曲〉の作曲に取り組んだ。学生生活を反映した作品にすべく、ブラームスは学生歌を取り入れようと考え、「ドイツ学生のための酒宴歌集」に収められた4曲が作中に用いられることになった。

曲は弦楽器による歯切れのよい序奏で開始され、やがてトランペットにより、“われらが立派な校舎を建てた”^{おごそ}の旋律が厳かに演奏される。力強く高潮した後、ヴァイオリンが流麗でのびやかな“祖国の父”の旋律を奏でる。続いて現れるファゴットによるおどけた旋律は、“新入生の歌”（かつて日本でも「大学受験ラジオ講座」のオープニングテーマとして親しまれていた）。各主題を展開させた後、終結部では“さあ、愉快にやろう”の旋律が現れ、にぎやかに曲を閉じる。酒宴で歌われる学生歌が、シンバルやトライアングル、大太鼓を伴った壮大な管弦楽曲へと華麗な変身を遂げた。

楽器編成／フルート2、ピッコロ、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（大太鼓、シンバル、トライアングル）、弦五部

メンデルスゾーン ヴァイオリン協奏曲 ホ短調 作品64

作曲：1844年／初演：1845年3月13日、ライプツィヒ、ゲヴァントハウス／演奏時間：約26分

フェリックス・メンデルスゾーン（1809～47）が最後に書きあげたオーケストラ作品が、このヴァイオリン協奏曲。1844年の完成から3年後に、作曲者は38歳で早世することとなった。

作品の構想は1838年まで遡る。ライプツィヒ・ゲヴァントハウス管弦楽団の指揮者を務めるメンデルスゾーンは、同楽団のコンサートマスターであるフェルディナント・ダーヴィトのために協奏曲を書こうと考えた。しかし思うように筆は進まず、作曲は難航する。それから6年後、ベルリンの芸術アカデミーを辞職して公的な演奏活動から距離を置いたことを機に、メンデルスゾーンはふたたび本格的にこの協奏曲に取り組み、ようやく完成させた。ダーヴィトからは独奏部分について技術的な助言を仰いでいる。

1845年のゲヴァントハウス管弦楽団による初演ではダーヴィトが独奏を務めたが、メンデルスゾーンは体調不良により、代役のニルス・ゲーゼ（デンマークの作曲家として名を残した）に指揮を任せた。

各楽章は切れ目なく演奏される。

第1楽章 アレグロ・モルト・アパッショナート 弦楽器とティンパニによる簡潔な伴奏に続いて、すぐに独奏ヴァイオリンが主題を提示する。憂いと安らぎが絶妙のバランスで混じりあったこの主題は、メンデルスゾーンのトレードマークと呼びたくなるほど広く親しまれている。新機軸は独奏者のみで演奏されるカデンツァの位置。伝統的には終結部の直前に置かれるところが、展開部と再現部の間に配置される。カデンツァをメインディッシュの後のデザートにするのではなく、楽章全体と一体化させようという意図が。

第2楽章 アンダンテ 前楽章の終わりからファゴットの持続音を引き継いで開始される。独奏ヴァイオリンが夢見るような主題を奏でる。悲痛な中間部をはさんで、冒頭主題が回帰する。

第3楽章 アレグレット・ノン・トロppo～アレグロ・モルト・ヴィヴァーチェ。第2楽章中間部の主題にもとづく序奏をはさんで、晴れやかなファンファーレとともに主部へ。独奏ヴァイオリンが名技性を発揮しながら、明るく活発な曲想をくりひろげる。

楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、弦五部、独奏ヴァイオリン

ムソルグスキー（ラヴェル編） 組曲〈展覧会の絵〉

作曲：1874年（原曲）、1922年（編曲）／初演：1922年、パリ、オペラ座（編曲）／演奏時間：約35分

ロシアの作曲家モデスト・ムソルグスキー（1839～81）は、若くして亡くなった友人で建築家・画家のヴィクトル・ハルトマンの回顧展に足を運び、彼の作品を題材としたピアノ独奏のための組曲〈展覧会の絵〉を作曲した。出版は作曲者の死後となり、後にセルゲイ・クーセヴィツキーの委嘱でモーリス・ラヴェル（1875～1937）が管弦楽用に編曲したことから、世界的な人気を獲得した。プロムナード 5拍子と6拍子が混在し、展覧会を訪れた人が立ち止まったり歩いたりする様子を思わせる。どこか聖歌のような雰囲気も。以後、各曲の間に形を変えながら「プロムナード」がくりかえし登場する。

第1曲 “グノームス” 不気味なノーム（地の精）が飛び跳ね、叫ぶ。

第2曲 “古城” サクソフォンが寂しげな主題を奏でて、郷愁を誘う。

第3曲 “テュイルリー” 無邪気に遊ぶ子供たちの様子が描かれる。テュイルリーとは公園の名前。

第4曲 “ピドロ” 曲名は農夫が用いる牛車のこと。重い荷車を苦しそうに

引く牛たち。牛車が次第に近づき、やがて遠ざかる。

第5曲 “殻をつけた雛鳥のバレエ” 雛鳥によるユーモラスなバレエ。

第6曲 “サムエル・ゴールデンベルクとシュムイレ” 金持ちで太ったサムエルと痩せた貧しいシュムイレのふたりのユダヤ人が登場する。重厚な弦楽器が傲慢なサムエルを、弱音器付きのけたたましいトランペットが卑屈なシュムイレを表現する。ふたりの主題が交錯し、重なり合う。**第7曲** “リモージュ” にぎわう市場へ買い物にきた女性たちが、ベチャクチャとおしゃべりに興じる。

第8曲 “カタコンブ” 曲名は地下に掘られた共同墓地のこと。金管楽器が厳かな雰囲気を生み出す。

第9曲 “鶏の足の上の小屋” 突然の強奏が緊迫感を高める。題材となった絵に描かれるのは、にわとりの足の上に立つ時計付きの小屋。民話に登場する妖婆バーバ・ヤガーの棲家。

第10曲 “キエフの大門” 石造りの堂々たる門に鳴り響く賛美歌風の主題。輝かしいクライマックスが築かれる。

楽器編成／フルート3（ピッコロ持替）、オーボエ3（イングリッシュ・ホルン持替）、クラリネット2、バスクラリネット、ファゴット2、コントラファゴット、アルトサクソフォン、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ（バリトン）、ティンパニ、打楽器（太鼓、シンバル、トライアングル、サスペンデッド・シンバル、小太鼓、ムチ、ラチェット、シロフォン、グロッケンシュピール、銅鑼、チューブラーベル）、ハープ2、チェレスタ、弦五部

柴辻純子 (しばつじ じゅんこ)・音楽評論家

プロコフィエフ アメリカ序曲 変ロ長調 作品42a

作曲：1926年、1928年（オーケストラ版）／初演：1927年2月7日、モスクワ／演奏時間：約10分

セルゲイ・プロコフィエフ（1891～1953）は、1918年にロシア革命の混乱を逃れて、シベリアと日本経由でアメリカに渡った。祖国では〈古典交響曲〉（1917年初演）の成功でロシア・モダニズムの旗手として注目を集めたことから、新天地でも活躍できるだろうと期待を抱いていた。しかし、オペラの作曲にこだわる彼の創作姿勢はアメリカでは受け入れられず、大きな挫折を味わった。その後、パリに拠点を移したものの、プロコフィエフの強烈な個性は周囲を困惑させ、そこでも彼は馴染むことができなかった。

〈アメリカ序曲〉は、自動演奏ピアノの製造で急成長したエオリアン社の依頼で、ニューヨークに建設中の新社屋内のリサイタルホールのために1926年に作曲された。このホールは、ガーシュインが〈ラプソディ・イン・ブルー〉を初演した42丁目のエオリアン・

ホールとは異なり、150席と小規模だったので、プロコフィエフは、低弦と管楽器、2台ずつのハープとピアノ、チェレスタ、打楽器という変則的な楽器編成の、17人の奏者による序曲を書いた。1920年代のニューヨークの喧騒^{けんそう}と活気、あるいはその危うさ^{もろ}、脆さを連想させるような音楽だが、しかしそこで演奏されることはなく、翌年、ソ連の公式招待に応じて一時帰国した際にモスクワで初演された。

プロコフィエフは「旋律はわかりやすく書いたつもりなのに、新しい工夫を受け入れることが拒まれた」と語ったように、この初演は不評に終わった。その後、オーケストラ用に編成を拡大させたが、彼の管弦楽曲の中では取り上げられる機会は多くない。トランペットで始まる快活な音楽が繰り返され、その間に穏やかで懐古的な楽想や神秘的な音楽がはさまれる。

楽器編成／フルート2、ピッコロ、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2、バスクラリネット、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（大太鼓、シンバル、小太鼓）、ハープ2、ピアノ、チェレスタ、弦五部

バーンスタイン 交響曲 第2番〈不安の時代〉

作曲：1947～49年、1965年（改訂）／初演：1949年4月8日、ボストン／演奏時間：約35分

今年生誕100年を迎えるレナード・バーンスタイン（1918～90）は、20世紀アメリカを代表する指揮者、作曲家、ピアニストとして世界的に活躍した。1957年に初演されたミュージカル『ウェスト・サイド物語』の大成功によって（61年に映画化）、その名前は広く知られ、同年ニューヨーク・フィルハーモニックの首席指揮者に就任、さらに音楽監督として名声を確立した。

バーンスタインは、交響曲を3曲残している。第1番〈エレミヤ〉（1943）と第3番〈カディッシュ〉（1961～63）は、いずれも彼自身がロシア系ユダヤ人の移民であることから、ユダヤ教に対する意識に支えられているが、第2番〈不安の時代〉は、イギリス出身でアメリカに帰化した20世紀の大詩人 W. H. オーデン（1907～73）の同名の長編詩から着想を得て書かれた。1947年に発表された『不安の時代』は、第二次世界大戦末期のニューヨークを舞台に、偶然知り合った男女4人の若者が互いに人生について語り合い、夜明けとともに、それぞれ現実の生活へと戻っていく。都会における孤独と不安を描いたこの作品で、オーデンはピューリッツァー賞を受賞した（1948年）。

バーンスタインは、1947年の夏にこの詩を読み、すぐに触発された。多忙な仕事の合間に、彼によれば「フィラデルフィアで、マサチューセッツで、テルアビブで、飛行機内やホテルのロビーで」書き進め、完成。1949年4月8日にクーセヴィツキー指揮のボストン交響楽団とバーンスタイン自身のピアノ独奏で初演された。

全体は、大きく2部に分けられ、それぞれ切れ目なく演奏される三つの曲から成り、オーデンの詩と関連のあるタイトルが付された。いわゆる20世紀の前衛音楽ではないが、ジャズや軽音楽風の要素を含め、変奏やパッサカリアといった伝統的な手法を意識するなど自在な発想で書かれ、その音楽的構構力やオーケストレーションには並々ならぬものがある。交響曲となっているが、ここでは独奏ピアノが導き手となって進められる。

第1部 プロローグ 酒場で出会った孤独な4人の若者たち。クラリネット2本の寂しげな二重奏からフルートのゆるやかな下行動機までの短い音楽。**七つの時代（第1変奏～第7変奏）** 若者たちが人間の幼年から死に至るまでを七つの時代に分けて語る。独奏ピ

アノがプロローグの旋律を発展させて始まるが、厳密な主題の変奏ではない。ドラマチックな第2変奏などを経て、第6変奏は独奏ピアノのみの密やかな音楽。オーボエから始まる第7変奏で静かに収まる。七つの段階(第8変奏～第14変奏) 4人が想像する旅の道のりが七つの変奏に現れる。第8変奏は低音が規則的な動きを反復するパッサカリア風。第10変奏は4+3の複合拍子、第11変奏は独奏ピアノが導くフガート、第13変奏でコラール風の旋律を高め、最後は決然と結ば

れる。

第2部 挽歌 独奏ピアノの「和声的な方法による12音音列」(バーンスタイン)で始まる緩徐楽章。喪失感をもった旋律が広がり、独奏ピアノのカデンツァを含む。**仮面劇** 若い娘のアパートでのパーティ。才気煥発なジャズは不安を忘れさせるが、彼らの本音は……。**エピローグ** ジャズは続くが、現実へと引き戻され、弦楽器にプロローグの旋律が現れる。壮大なフィナーレの独奏ピアノのカデンツァは、1965年に書き加えられた。

楽器編成／フルート2、ピッコロ、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2、バスクラリネット、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器(大太鼓、シンバル、サスペンデッド・シンバル、小太鼓、テナー・ドラム、トライアングル、銅鑼、グロッケンシュピール、シロフォン、鐘、木魚)、ハープ2、ピアノ・ソロ*、チェレスタ、弦五部、独奏ピアノ

※作曲家の指定により、正確な調律を施していない状態で演奏されます。

ショスタコーヴィチ 交響曲 第5番 ニ短調 作品47

作曲：1937年／初演：1937年11月21日、レニングラード／演奏時間：約44分

ドミトリー・ショスタコーヴィチ(1906～75)は、革命と動乱の時代に生まれ、ソ連の独裁体制下で、政治的に翻弄されながら創作を続けた。レニングラード音楽院の卒業作品として書かれた交響曲第1番(1926)で楽壇の寵児として一躍注目を集めたものの、1936年にソ連共産党の機関紙『プラウダ』の無署名記事でオペラ〈ムツェンスク郡のマクベス夫人〉(1930～32)が、ひどい批判を受けた。それ以後も

称賛と批判が繰り返されるなか、芸術的な(もちろん皮肉たっぷりの)譲歩もしながら独自の音楽を作り上げた。

交響曲第5番は、『プラウダ』紙に批判記事が掲載された翌年(1937)に、わずか3か月で書き上げられた。スターリンの独裁のもと、音楽への弾圧も始まり、大粛清の波はショスタコーヴィチのもとにも迫ってきて、彼の親類や友人たちも次々と姿を消した。そのため、西欧に毒された難解な音楽を書く作曲家とレッテ

ルを貼られたショスタコーヴィチは、予定された交響曲第4番の初演を撤回し、新作でなんとか名誉を回復しようとした。

第5番は、古典的な4楽章構成で、「苦悩から歓喜へ」といったベートーヴェンの交響曲を思わせる構図やクライマックスの構成力など、政府当局に非難の際を与えないように、分かりやすさを前面に出した。10月の作曲家同盟による予備審査を経て、十月革命20周年を祝う演奏会で初演されることが決まった。しかし、当初指揮をする予定だったレニングラード・フィルハーモニー交響楽団の音楽監督シュティードリーが国外に脱出してしまい、代わりに34歳のエフゲニー・ムラヴィンスキーに白羽の矢が立った(以後、約4半世紀にわたる協力関係が続く)。初演は大成功を収め、ショスタコーヴィチのソ連国内での地位は確かなものとなる。それでも友人には「第4楽章の最後を長調のフォルティッシモではなく、短調のピアノッシモにしていたら一体何と言われただろう」と話したように、その心中は複雑だった。

第1楽章 モデラート～アレグロ・ノン・トロッポ、ニ短調 変形されたソナタ形式。音程の跳躍と付点のリズムが特徴的な序奏主題、ヴァイオリンによる教会旋法の音階に基づく第1主

題、規則的なリズムの刻みの上でのびやかに歌われる第2主題。これらが縮小、拡大、組み合わせられて展開する。音楽はピアノが入るところから力強さと激しさが加速し、第1主題がユニゾンで叫ぶクライマックスは強烈だ。最後にフルートとホルンで〈カルメン〉の旋律が引用されたり(熱烈な恋愛の相手への仄めかしとも言われる)、終結のチェレスタも暗示的である。

第2楽章 アレグレット、イ短調 スケルツォ楽章。低弦の主題に導かれ、第1楽章第1主題に由来する楽想をさみ、グロテスクな表情をみせる。中間部はハープの伴奏でヴァイオリン独奏がレントラー風の旋律を奏でる。再現部はファゴットからで、シロフォンの音色も耳に残る。

第3楽章 ラルゴ、嬰へ短調 金管を含まない緩徐楽章。死や孤独を連想させる哀しみの音楽がドラマチックに広がる。最後はハープとチェレスタが幻想的な音色を紡ぎ出す。

第4楽章 アレグロ・ノン・トロッポ、ニ短調 金管とティンパニの強烈な主題が突き進む。大らかな第2主題が現れ、未発表の自作の歌曲の一部も引用される。終結部(ニ長調)で執拗に繰り返されるラ音は、勝利の叫びか、それともそこに託す思いがあったのだろうか。

楽器編成／フルート2、ピッコロ、オーボエ2、クラリネット2、エスクラリネット、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器(大太鼓、シンバル、トライアングル、小太鼓、シロフォン、グロッケンシュピール、銅鑼)、ハープ2、ピアノ、チェレスタ、弦五部